

「金持達が、そんな氣を起しやしないよ。彼奴等は、人間ぢやないんだ、鬼だ！」と賢太郎は、他の事を考へながら、ほんやりした聲で尙ほもさう云つた。「彼奴等は、鑛夫達がどんなに苦しんでゐてもあたりまへだと考へてゐるんだからね！」

賢太郎が、考へてゐた他の事とは、貧乏人達が、次第々々に集つて、強くなつて行くと云ふ事であつた。金持達が、兵隊に命令しても、びくともせぬ位強くなつた貧乏人の強い集團を彼は漠然とではあるが、想像してゐたのであつた。それは、兵隊のやうに××を持ち、兵隊のやうに規律正しい、貧乏人の××でなければならなかつた。彼はそればかりを考へ續けた。新之助の話を彼はもう聞いてはゐなかつた。

新之助の出發の日が来た。賢太郎は、幼い頃からの素晴らしい彼の教師であつた新之助との訣れに、最早や何等の愛惜をも感じなかつた。彼は只だ、新之助が東京に行く——と云ふ事に云ひ難い羨望を感じた。彼は、新之助を送つて歸る路々心秘かに自分にかう誓つた。

「俺も、學校を出たら東京に行く。きつと行く。両親が許さなかつたら、飛んぢまふんだ！俺は働いて、獨學するんだ。——しつかりしろ、賢太郎！誰にも邪魔されるな！弱い者の本當の味方に

なる爲めに、知らなければならぬ事を、皆知れ！」

四

轉任して来た教師の息子が、只一人、賢太郎の友達であつた。

教師の息子山根は、驚くべき秀才であつたが、體は虚弱で蒼い顔をしてゐた。終始頸に綳帶をして、體操の時間は何時も皆から離れて休んだ。

彼は、何故だか、自分が教師の息子であるといふ事を恥ぢてゐるように見えた。その事で、彼をかちかちたりする者があると、彼は顔を一層眞青にして、そこにある物を、手あたり次第相手に投げつけるのであつた。

狂人だと生徒達は口々に云つた。彼は孤獨であつた。

賢太郎は、學課に於けるこの競争者が、皆から除外されてゐるので友達になつた。そして、山根に對して、兎や角云ふ者を向ふに廻して小つぴどくやつつけて呉れた。彼はさうすることに「義務」のやうなものを感ずるのであつた。

賢太郎は、度々山根の家へ遊びに行つた。學校から随分遠方の川縁の草家に、教師一家は住んでゐた。

教師夫妻と五人の子供それと老害した老人——の八人暮しの家庭は、どうして生きてゐるのか全く見當のつかない貧乏な家庭の一つであつた。おまけにこの老人は、昔從軍した會津戦争か日清戦争を絶えず想ひ出して大聲を出した。

賢太郎の友達留吉は長男で、一番末の女の子は未だ乳を吸つてゐた。しかも、山根によく似た蒼白くて小さい母親の腹は、もう次の番の子供を妊つてゐるのであつた。

留吉は、家に歸ると直ぐ弟や妹達の世話をしなければならなかつた。

最初、賢太郎が留吉と一緒に彼の家に行つた時、母親は、子供を留吉に渡しながら云つた。

「何處で路草食つてゐたのだね。お前は？」低い聲でさう云ひながら、彼女は留吉の方ではなく、賢太郎の顔ばかり凝視してゐた。この母親ばかりではなく、小さい女の子や男の子、丸る二つになるかならぬかの赤ん坊までが瞬きもせず、賢太郎を凝視してゐるのであつた。「七分間も今日は歸りが遅そかつたのだよ。七分間も……。」

その低い調子は、別に怒つてゐるのでもなかつた。併し、賢太郎は、何だか自分が悪い事でもしたやうな氣がして來た。彼は、留吉に、警察署裏の自分の家まで來て貰つて、それから此處へ一緒に出掛けて來たのであつた。

賢太郎は友達顔を見た。留吉は、赤ん坊を背に負はされて、もう一人の四つ位の妹の手を引いてゐた。彼は、怒つたやうな顔をしてゐた。しかし母親に對してまるで一言も口を利かなかつた。

「時間を大切にしない者は決して立派な人間にはなれないものだよ。」と母親は、尙も賢太郎をチラチラと見ながら續けた。「それからお前、友達と云ふものは、悪い奴なら一人だつて持たない方がいゝんだよ。それに善い友達と云ふものは、滅多にあるものぢやない。」

「行かうよ。」と留吉は賢太郎に云つた。

彼は母親にはまるで相手にならず歩き出した。

「留や、お前——」と母親は、息子に走り寄つて來てその耳に口をつけて囁いた。それははつきり賢太郎にも聞えた。「あれは、何處の子だね、お前？ あの子の父親は、役人かね？ それとも商賣人かね？ まさか、素狀のよくない下品な商賣をしてるのぢやあるまいね。」

「晩にでも話すよ。お母さん」と留吉は蒼蠅さうに云つた。「大河君はい、友達だよ——」
 「晩に——、あ、晩でも結構だよ。よく聞いて置くんだよ。大河君——あの子の名字は大河と云んだね。それから、あの子がお前にどんな事を話したかも、——よく覚えて置くんだよ。そして晩に話すのだよ。あの子が、お前に善い友達か悪い友達か、さうしたらちやんと判るよ。お母さんが考へてあけるからね。」

母親は、さう云ひ終ると、賢太郎の前を、此方には見向きもせず家へ引返へさうとした。所がその途端に、家の中から、いきなり恐しく大聲で叫ぶ者があつた。

「おい、こら！ 留吉！ 行くな、危い！」

そして、背の高い瘦せ衰えた老人が庭に向いた障子を引あけて現れた。老人は、口と顎とに見事な白髯を持つてゐるが、口髯の左半分と顎髯に一握り程の毛が眞黒であつた。それは全く滑稽に見えた。「行くな、危い！ 危いと云ふに！」と老人は手を振りたくつて叫びつゞけた。「敵の斥候が、視ひを決めて待つとる！ 堤防から頭を出すと、一遍に狙撃たれて終ふぞ！ 頭を低くしろ！ 地べたに腹匍え！ 草でも何でもいゝから身を隠せ！」

老人が、この言葉を皆まで云つて終はらぬうちに、母親は、まるで、此方が狂人のやうになつて、障子から身を乗り出してゐる老人を突はなして障子を激しく閉めた。そして、賢太郎をぎろつと睨めつけた。

「どうしたんだ、——あれは、君の祖父様かい？」と賢太郎は黙つて歩きつゞける留吉に云つた。「僕ア吃驚して終つたよ。」

留吉は、何時もの怒る時の蒼い顔になつた。彼はちらと賢太郎の顔を見たゞけで何も答へなかつた。二人は歩き續けた。

賢太郎は、その質問が、友達の氣に入らないのを知つて黙り込み、友達の奇妙な母親の事を心に繰返へしてみた。そして彼は心に呟いた。

「可笑しな者ばかりだなア……」

「君は！」突然、留吉は立停つて云つた。「僕の家のことを、話したけば、誰にでも話したらいゝや！」
 「話したければ？——君の家の事をかい？ 何だつて話すんだ？」賢太郎は、留吉が何の爲めにそんな事を云ひ出すのかを不思議に思つて云つた。

「僕の家は滅茶苦茶だ。ひどい貧乏だ！」と留吉は、彼の母親のやうに、賢太郎を凝視めつけて云つた。「それに、祖父様はまるで狂人だよ。まるでぢやない本物の狂人だ。しかしね、君だつてね、永生きをしてみるがいゝや、あんな風になつちまふんだ！ 誰だつて皆あんな風になつちまふんだ。」

五

賢太郎が、山根の一家のことを誰にも云ひ觸らさないことが判ると、山根は一層賢太郎と親しく交際ふようになつた。

山根の母親も、賢太郎が、可愛い息子にとつて決して「悪い友達」でないと判つたらしく、餘りぢろぢろと此方を凝視めなくなつた。只だ、賢太郎の父親が、請負師だと云ふことに、多大の不滿を感じる風であつた。彼女は、賢太郎に、その父親の様子を、矢次ぎ速やに根掘り葉掘り問ひ質したものだ、それに對して、滅多に母親にも口を利かない山根が母親を到頭批難した程であつた。

「お止しよ！ もう！」と彼は、母親を批難すると云ふことに昂奮してぶるぶる震えながら蒼白な顔で云つた。「僕が、他所で、お父さんの事をそんなに訊かれたら、どんな氣がするだらう！ 僕は、訊

く奴に唾液引つけてやるよ！」

「留吉や——それア、止せと云へばお母さんは止すよ。」と母親も、ひどく昂奮して息子に云つた。「それア止すよ。決して云やしないよ。でもね、お前、お前がお父さんの事を誰かに訊かれたつて、何も唾液を引つけることはないぢやないか。お父さんは、先生だよ。學校の先生だよ。決して素性の判らぬ下品な仕事をしてゐなざるんぢやない。だからお前は、何も、唾液をひつかけたりしちやいけな

いよ。」
「僕ア引つかけるよ！」と息子は激しく云ひ放つた。「引つけてやるとも！ 下駄をぶつけて引搔いて噛みついてやるんだ！」

驚いたことに、山根のキラキラ光る不氣味な眼から涙があふれ頬をたらたらと傳つてゐた。賢太郎は、何故、彼が泣くのか、見當がつかなくつた。

母親は、息子の様子に、おろおろしてこれも一層蒼褪め、眼には涙を浮べてゐた。

「あゝあゝ、お母さんに怒つたのかい？ お母さんはそんなにお前を怒らすような事を……あゝ、留吉や、お母さんが悪るかつたよ……」と母親は息子の肩に優しく手をかけて云つた。（息子はそれを邪

慳に拂ひ除けた。「お前は、本當に怒つたのだね。そんな心算でお母さんは云つたのぢやないんだから氣嫌を直して。それアお前、そんな事を、お前に訊く者があつたら——何か笑ひ事の種にふざけて訊いたりするのだつたら——その悪者にお前がどうしよう構やしない。あゝさうとも、さうとも。でもお母さんは、大河さんに色んな事を聞いたのは、何もそんな悪い心があるからぢやないんだよ。泣かないで、え、留吉や泣かないでお呉れよ。さア氣分を代えて遊んでお出でよ。あゝさうだ砂糖水を拵えてあけるから、飲むといよ。——あゝもう、お母さんは止してらぢやないか。もう大河さんになにも訊いても居ないし訊きもしないよ。お前がそんなに泣くと私も涙がこんなに出で来るんだよ。泣かないで、お呉れよ後生だから……。お母さんは、お前が泣くと胸のこの所がきりきりと痛くなる。お前が泣き止めないと、お母さんは死んで終ふかも知れないよ。きつと、お母さんは早死にをして終ふんだ。」

稚い子供達も聲を揃えて泣き初めた。隣の部屋では老人が絶えず大聲で叫び立てゝゐた。

或る日、賢太郎は、思ひ切つて山根に、どうして、父親の事であんなに怒つたのかを訊ねたけれど、山根は怒りはしなかつたが答へもしなかつた。賢太郎にその理由が判つたのは間もなくの事であつた。

た。

山根先生は、高等科の教師であつた。生意氣盛りの生徒達は、先生を「山猿」と呼んでゐたが、この呪ふべき渾名は、この先生が最初に教師となつた學校からすつと持ち續けて來たものだと言ふことだ。學校から學校へどうしてそれが傳へられるのか、生徒達は、先生が此處の學校に來て一週間と経たないうちに、それを知つてゐたのだ。噂によると、その渾名を傳へた犯人は、生徒達ではなく、教師の一人だと云ふ事であつた。併し公平な眼で見て、假令、それが誰かによつて傳へられなくとも、山根先生には、少くとも「山猿」に近い渾名がつけられたに相違なかつた。何故と云つて——

小さい、背の曲つた軀つきも、猿に似てゐたが、横じはの多い狭い額、丸くてきよきよする眼、小さい鼻やへの字型の口、短い顎、そして、眼の下までが猿のやうに赤いのであつた。若し、遺傳學者が、山根先生を見たら、きつと容貌に於ける「先祖返り」の好標本だとも云ふかも知れぬ程であつた。

容貌が、その人の人生觀に多大の影響を及ぼすと云ふことは稀なことではない。頸に縋帶を卷いた賢い小學生の山根留吉は、父親の容貌を恥ぢてゐたのだ。父親の容貌が、息子の

精神を極端に任せさせたこと云ふ事は可笑しな話だと思はれるかも知れない。併し、その父親の職業は何だ！ 教師だ。教師達が生徒達に畏れられながらも馬鹿にされるのは、世界的現象である。若しその教師に、畏れを抱くなものもないと云ふこの山根先生の場合はどうだらう？——奇妙な名前を持つてゐると云ふだけでも、相當の苦勞をしなければならぬ小學生にとつて、その父親が同じ學校の教師で、しかも只だ馬鹿にされるだけの者である山根の場合は、並大抵の苦勞ではないのだ。おまけに、彼の家庭は貧しく、老人は戦争の幻影に絶えずおびやかされてゐる狂人であつた。これら一切が、少年の心を掻き亂したのだ。

苦勞は、年齢には不釣合な、世の中に對する「考へ」を纏めさせるものである。山根は、早くも、「呪ふべき世間」を向ふに廻してゐたのだ。

或る日のこと、山根が賢太郎にきいた。

「君は大きくなつて何になるんだね？」

「弱い者の味方になるんだ」と賢太郎は言下に答へた。「金持達が我儘勝手に威張つてゐるのをやつつけろんだ。君は何になる？」

「僕は——」と山根は賢太郎の眼を見つめて云つた。「子守りになるんだ！」

「子守り？」

「あゝ又弟か妹が生れるんだよ。」

賢太郎は、友達に云ひ難い苦痛の色が現れてゐたので、友達は子守りが嫌で耐らないのだと云ふ事を察した。

「僕は東京に行くんだ！」と賢太郎は云つた。「君も東京に行かうよ。」

「東京かい？ 僕はロンドンに行かうよ。ふつふ！」と山根は子供らしくない歪けた笑ひ方をして云つた。

「さうぢやないよ。僕の所は、金持ちぢやない。不景氣なんだ。両親は僕を東京にやつて呉れやしない。だから僕は、東京に飛んちまふんだ。そして、一人で働いて勉強するよ！ 君も、若し本當に子

守が嫌やなら、さうするがよい。僕はきつと飛ぶ、僕の友達に勝ちやんもさうしたんだからな！」

「僕も、體が丈夫だつたら、さうするかも知れないんだがな。僕は駄目だ。僕は子守りをして、二十にならないうちに死んで終ふんだ。それでお終ひだ。」

さう山根は云つた。彼は自分が二十にならないうちに死ぬと云ふことを前から確信してゐた。しかも彼は、それを話すと、何だか氣が樂になるとでも云ふ風に常になくはしやいで冗談を云つたり奇妙な程笑つたりするのであつた。

六

卒業式がもう直ぐだと云ふ頃であつた。中學校の入學試験を受けに行つた三人の生徒達と共に山根が、突然學校を休んだ。賢太郎は、二十前に死ぬと云つた友達の言葉をばつと思ひ出して、學校が終るや否や堤防を走つて山根の家を訪ねた。

立つけの悪い入口の障子戸を引あけると、いつものやうに襦袢の臭氣がふんぶんしたが、家の中はひっそりとしてゐた。

「山根君！」

「何者だ！」と老人が、途法もない大聲で叫んだ。「貴様は、何者だ！ 名前を云へ！」

「お爺さん、僕だよ！ 留吉君はどうしたんだね？」

「貴様、名を名乗れ！ 無禮者！」

「チエッ！ いやだなア、僕だよ！ 一體山根はどうしたのだらうな？」

奥の間の障子の破れから老人が此方を覗いてゐるのを賢太郎は見つけた。

「お爺さん、皆どうしたんだい？」

髯が障子を擦る音がした。

「拙者は如何にも山根惟臣だ！ 老人は威嚴をもつて云つた。「山根は此處に居るぞ。逃げも隠れもせぬ！ さア縛れ！ 何處にでも連れて行け。貴様に功名を立てさせて呉れる。貴様が、敵の間者と云ふことはちやんと判つてゐるよ。——あゝ、それ！ 五百程の兵が河を涉つて來た。騎兵も居るぞ。それぞれ、狙ひを定めて撃たぬか！ それ、それ、それ！」

「皆居ないんだなア……。僕又來るよ。」

賢太郎は表へ出た。すると、多勢の子供達を連れた、山根の母親が田圃の中を歸つて來るのが見えた。子供達の中にも山根は居なかつた。

賢太郎が聲をかける前に、母親は此方を見つけて、手をあけた。

「さア、さア、さア——。一寸まア大河君、家へ入つて下さい。」と近づいて来た母親は大聲で喋り立てた。彼女は、賢太郎のことを、愉快な時には「大河君」と呼ぶのである。「大河君は、大分待つて居ましたか？ 誰も居ないので。さア、もう皆歸つて来ました。留吉の善い友達に、何を御馳走しました。砂糖水を——砂糖水がいゝでしょう。さ、家へ入つて下さいよ。私は本當に嬉しいんだから、留吉の友達にも是非悦んで貰はなければなりません。」

「小母さん。山根君はどうしたのですか？」

「さアその話を、大河君にしなければなりませんよ。まア一寸上へ上つて下さい」と彼女は狼狽ながら、子供達に水を汲んで来いと茶碗を持って来いと忙しく命じた。「砂糖は、お母さんが皆に入れたあけるからね。で、ねえ大河君。まア聞いて下さいよ。私の妹が東京に居るのですよ。私の親戚と云つたら、まアこの妹が只一人と云つてもいい位ですよ。他の者は、名ばかりの親戚で往き來は勿論、時候挨拶の手紙をやるでもないような、不人情者ばかりです。何故でしょう？ ね、大河君、これは私の方が貧乏だからの事ですよ。私の方も、そんな人でなしの親戚など頼る心算はありませんからね。只つた一人、私の實の妹が、東京に居るのですがね。この妹の婚は、商賣をしてちや

んとやつてゐるのです。商賣人と云ふものには餘り上品な者は居ないけれど、下品なものばかりでもありませんからね。その證據に、私の實の妹が、この婚に相談して手紙を寄越したのですよ。それが、さう、かれこれ一月も前のことでしたかねえ。手紙に何と書いてあつたと思ひます？ 『お願ひがある——』とかうですよ。どんな「お願ひ」と云ふと、妹の一人息子が今年六年生になる。所が、あまりこの子が成績がよくない——とまアこんな譯で、『お願ひがある』と云ふ譯です。あゝ、その『お願ひ』がどんな「お願ひ」と云ふと、留吉に是非教へて貰ひ度いと云ふ「お願ひ」なんです！ つまり、留吉が、その子の先生になつて來年は是非中學校に入れるようにして貰ひ度いと、まアかう云ふ「お願ひ」なのです。で、留吉に東京に來て貰つて、今年中學校の試験を受けて入學出來たらずつと自分の家から中學校に通つて、自分の息子を教育して貰ひ度いと云ふのです。そして、云ふことがいゝぢやありませんか。「貴方の家や留吉さんには御迷惑の事とは存じ候へども、是非共御承知下され度く願上候」——えゝゝ、大河君、私は、稚さい頃から、この妹が一番好きだつたのですよ。私から云つちや何ですけれど、心根の優しい、そして仲々美しい女ですよ。」

「それぢや山根君は東京へ行つたのですか？」と賢太郎は、突然行つて終つた友達に羨望を感じながら云つた。

「まあ、お聞き下さい。」と彼女は急ぎ込んで續けた。「それから私方から承知したと返事をやつたのです。ようござんすか、するとどうでしょう、妹が、突然迎えに来たぢやありませんか。東京からわざわざ……。それが昨日のお午頃です。そして、昨晚すぐ東京に出發して終つたのです。『一日も速く東京へ歸へらないと試験の日に間に合はない』と云つてね。それも本當だつたし、又きつと、妹は、私のこの家を見て吃驚りしたのです。とてもこんな所に泊れるものぢやないと思つたのです。留吉は妹と一緒に俥に乗つて東京へ行つて終ひました。あの子は、『お母さん、きつと僕中學校に入つてみせるよ！』と俥の上から私に云ひました。そして、妹や弟に一人々々さよならさよならと云ひました。あの子も涙ぐんでゐました。私は、悦しいのに何故だか涙が出て涙が出て、何も云ふことが出来ませんでした。あの子に私は前から羽織を一枚拵えてやらうと思つてゐましたけれど、それが

間に合はなかつたのが悲しいし、小言一つ云はずに、弟や妹達のお守りをよくして呉れたのがいぢらしいし——只だ、もう私は、泣いて泣いて別れて終ひましたよ。昨晚ちう、到頭あの子のことばかり考へて、まんぢりともしなかつたので、今日は、ほらこんなに眼の下が黒くなつてゐるでしよう。未だ私には、判りませんよ。これが悦しいのか悲しいのか……。私は、朝になると子供を呼ばうとする直ぐ『留や』と口に出るのです。それで私がどんなに、『留や、留や』と毎日呼び續けてゐたか、判りましたよ。あの子は、もう東京に着いてゐるでしよう。私は、手紙をあの子に書きました。今それを出して來た所です。」

母親は、何故か非常に疲れたやうに肩を落して額顚を指で壓えた。子供達は砂糖水を拵へて呉れと口々にねだつた。

「お待ち！ お前達！」と母親は云つた。「留兄さんは、一錢のお金も持たずに東京へ行つたのだよ。羽織も着ず、破れたまゝの袴を穿いて——。お前達は、皆留兄さんの世話になつて育つたんだよ。皆心を揃えて、留兄さんの爲めに、儉約しようよ！ 留兄さんが不自由しないようにお金を送つてあげようぢやないか！ あゝ、あゝ、私は疲れた。ね、大河君、貴方に一言お尋ねしますがね、私の妹

賢太郎は、長い堤防を歩きながら、誰も彼もが、彼一人を残して東京へ去つたのを考へた。そしていよく、今度こそは自分の番だと心に叫んだ。

第六章

一

千九百二十×年のある春の朝であつた。

東京市の北方の工場地帯〇——町では、様々の氣笛が、町中の労働者達を呼んでゐた。まだ冷めた空氣は、それ等の響で震え、肥料會社や曹達會社の有毒瓦斯で嗅つてゐた。

大通りは、地面に腹匍つてゐる陰氣な家々から出て來る労働者達で、一ぱいであつた。この驚くべき人波は絶えず動き、この中に乗入れた心得違ひの自動車やトラックを全く停めて終つた程であつた。

大通りから一寸入つたS——労働組合支部事務所からも、二人の労働者が辨當を抱えて出て來たが、忽ち人波の中に溶け込んで終つた。雑踏の上に太陽が差して來た。

ものゝ三十分と経たぬうちに、通りの上には、空を流れる工場の煙の蔭がはつきりと落ち、交尾期の犬共がぞろ／＼と走つてゐた。

八百屋の店先に、ステッキをついた丈の高い背廣の青年紳士が立つて道を訊ねた。

「一寸お訊ねしますがね、此の邊に、労働組合の事務所があるのを御存じありませんか？」

「そんなものは知りませんよ。」と八百屋の女房が奥の方から怒鳴つた。

「二百五十番地と云ふのですがね。」と紳士は、ポケットから手帳を取り出しながら云つた。

「二百五十番地と云つても、少くはないですよ。交番に聞いたらい、でしよう。」

「交番は何處にありますか？」

併し、八百屋の女房は答へなかつた。紳士はもう一度訊ねようとしたが、自分に答へて呉れるだけの親切が、女房に全くないのを知つて、莞爾と笑つた。

「いや、どうもお邪魔しましたねえ。」と紳士は丁寧にお叩頭をして立去つた。彼は心の中で思つた。

「ははア、事によると、自分が今日一番初めの客だつたかも知れないな。何だか、そんな迷信があるのかも知れない。最初に来た客が道を訊ねたりするとその日の商賣運が悪いと云ふやうな、でなければ

ば、あんなに不氣嫌な筈はないからな。」

「一寸お訊ねしますが、交番は何處にありますか？」と紳士は、今度は、肴屋に訊ねた。

「交番ですか？ 大分遠いですよ。」と肴屋は云つた。「家を捜すのですか？ 何と云ふ家ですか？」

「S——労働組合支部事務所と云ふんです。御存じですか？」

「組合ですか。プロレタリアですね。はつは、組合事務所なら、あの八百屋の横丁に入つて左側の七軒目でさ。元氣な兄さん達が澤山居まさア。」

若い紳士は、八百屋の店先を通る時、ちらと奥の方を見て、好人物らしい笑顔を作つた。

所が紳士は、組合事務所でも、甚だ見當のつかぬ取扱ひを受けねばならなかつた。と云ふのは、若い組合員の一人は、紳士を刑事と見てとつたのだ。

「大河賢太郎？ そんな男は知らねえなア——。」これが紳士の受取つた返事であつた。

「そんな筈はないですよ。僕は、ちやんと手紙を貰つたのですからね。」と紳士は、頗るぞんざいな若い組合員に對して抗辯したものである。「是非、僕は會ひ度いのですがねえ。お取次を願ひますよ。」

「知らねえものは知らねえぢやねえか。」

「ぢや、誰か他の方は居ませんか。その人は知つてゐますよ。」

「いやに蒼蠅えぢやねえか。」と奥から大きな聲がした。「大河賢太郎なんて者ア此處に居ねえよ！」

「僕は手紙を貰つたのですよ。」と紳士は繰返へした。「手紙を持つて来るのを忘れたのは残念ですが、僕は大河の親戚の者で是非逢つて話し度い事があるのですからね。」

「君が是非逢ひ度いつたつてそんな者が居なければ、仕様はねえさ。」

押問答の末、結局紳士——名刺の裏に、自分の住居の地図と用件とを書いてそれを渡して呉れるよ
うにと托むより他仕方がなかつた。紳士は牧師新之助であつた。

「君が置いて行き度ければ勝手にするがいや。」と若い組合員は云つた。

青年紳士新之助は、通りに出た時、初めて、自分が刑事と間違えられたのだと氣がついた。彼はス
テツキを振りながら呟いた。

「餘程今日は日が悪いんだな。ははは！ 八百屋のかみさんが縁起をかつぐのも不自然ぢやないな。」

二

新之助が組合事務所を訪ねてから大約一週間たつて賢太郎は牧師の家を訪ねた。

彼の教會は、メソヂスト派に屬するもので、工場地帯から餘り遠くない、市に近い住宅地の目貫の
通りにあつた。随分以前に建てられた教會堂は洋風ではあるがバラックに近いもので、ペンキはもう
すつかり色褪せて、ほろ／＼で、これは大したものではない。併し、値打ものは、その廣々とした敷
地であつた。これは、古い教會員の地所を寄附として貰ひ受けたもので、行く／＼は日曜學校や幼稚
園の校舎を建てる計畫であつたのださうだが、今日に到るまで神様が「之を免し給はなかつた。」所が
附近は急速に「發展」した。教會を異分子とした商家が並んだ。地代が十倍二十倍に上つた。そこで
教會員達の間では、そんな廣い空地を遊ばせて置くのが勿體ないと思はれ出したのだ。今日ではもう
教會移轉に反對する幹事は誰も居ない状態であつた。只だ如何に有利にこの問題を實行するかで二三
の意見があつた。教會員を通じて、二三の土地ブローカーが活躍してゐたし、牧師に直接交渉に來る
町の有志も居た。

その晩は丁度水曜日の祈禱會であつたが、會の後、移轉問題に就いて教會として一層具體的に意見
を纏める爲の幹事會が開かれることになつてゐた。だから、減多に顔を出したことの無い幹事も出席

して、いつもにない賑かな祈禱會であつた。

幹事の一人は、『教會の大問題の爲めに心を一つにして盡くさんとする熱心な人々』を神が「み、そなはさん事」を祈つた。

次に若い神學生が、教會移轉の如きは、いと小さき取るに足らぬ事柄であり、我等は只だ信仰の爲めに、我等の祈禱會が盛になることを願ふのみである」と云ふ風な、少々棘のある祈りを放つた。

この男は、本来何でもかでも反対せずにはゐられない年頃と性分であつたのだ。

神學生の後には、之に賛成して、オルガンの上手な跛の令嬢が立つて、「心の神殿」の建設を高調し、聖書文句を澤山引用した。祈禱と云ふよりもむしろ一場の説教を試みた。噂によると、この令嬢は、先きの神學生とは非常に「話が合ふ」と云ふ事である。

次ぎ次に幹事やヒステリーの年増婦人や會社員等が神學生と令嬢との議論を、婉曲に反駁したり、何が何だか譯の判らぬ泣言を並べたりした。

かう云ふ賑かな祈禱會であつた。

祈禱會後の幹事會が終つたのが十一時を過ぎてゐた。幹事會の意見は、移轉には勿論異議はない。

地所を借すと云ふのは教會として第一面倒だし、何だか、氣持でもないしするから今さしあつて賣らなければならぬと云ふのは、移轉費用及新建築の爲めばかりである。

「賣るならば賣るで、賣り時が大切ですからね。」と幹事の一人が云つた。

「萬の物に時あり」ですからね。」と他の者が云つた。

「私はこんない、賣時はないと思ひますね。もう仲々値も上りアしませんよ。私の所へ話を持って来た男は、ほかの競争者よりも相當高く買ふと云つてますよ。」

「入札でもしますかねえ。はは！」

「むしろ、私の友人がやつてる、土地會社に托んだ方がいゝでしょう。」

「人手を借りるのだつたら、矢張り何と云つても三井の地所部にでもまかせたがいゝですよ。私の親戚が勤めてますからその方をあたつて見てもいゝです。」

一萬五六千——うまくいけば二萬の問題であつて、年六歩としても千圓と名のつく金だ。

牧師新之助は、傳道局に交渉して、移轉と同時に獨立教會にする野心を持つてゐた。併し幹事會にはそれを明かさせずに、先づ傳道局をあたつて見た上で幹事會に案を持込んだ方が有利だと思はれた。

會が濟んで、新之助は幹事達を教會から送り出した。

「いやどうして、二萬と云へば小さい金でないですからねえ、はつはつは！」と石段を降りる幹事の一人が笑つた。

新之助は、何故か、その笑ひ聲を聞いてぞつとした。

「神よ、幹事達の信仰を守り給へ！」と彼は祈りながら、會堂と廊下續きになつてゐる牧師館に歸つた。一風呂浴びて来ようと思つてゐる所へ、人聲がした。

「誰方です？ や、賢太郎君ぢやないか！ よく来て呉れたねえ。今やつと教會の方が濟んだばかりだよ。さア上り給へ！ あゝ、何と久しぶりだらうねえ。何年になるだらう、君と別れて——五年、いや六年、もつとかな！ 僕は、君にどんなに逢ひ度かつたらう。君が手紙を呉れた時には、實際悦しかつたよ。すぐその翌朝君の所へ出掛けたのだ。そして……ははは！ 僕は刑事と間違へられちやつた。さア此方へ來給へ。よく来て呉れたねえ！ 元氣だつた？」

丈は高くはないが逞しい一かどの労働者となつた賢太郎は、踵の傷んだ短靴を脱いで上つた。そして云つた。

「僕は、實は晩飯を食つてゐないんですがね。食べさして呉れませんか。」

三

「君が家出をした時随分僕は搜ねたものだつた。」と若い牧師は云つた。「君のお父さんが東京に出て來たんだよ。僕は、小父さんが口では強い事を云ひながら心ではどんなに君を愛してゐるかはつきり知つたよ。何しろ、小父さんは、あり得る最悪の場合だけを考へて落着けなかつたんだ。僕は君が僕の所を訪ねて來ないだらうと信じながら、何故つて、さうすれば折角の決心が揺ぐかも知れぬと君は思つたに違ひないし、足がつくかも知れないと思つた（らう）小父さんには、なアに、すぐ賢ちゃんに僕の所へやつて來ますよ。心配することはありませんと云つたものだ。」

「両親には相濟まぬと思つてゐますよ。今でも——」と賢太郎はバタ附のトーストを食ひながら云つた。「併しさうするより他に仕方がなかつたですからね。」

「それアさうだ。」と牧師は云つた。「で君は、今でも両親に氣の毒だと思つてゐるのだね。」

「そして、君は、今も最初の決心を裏切らない路を踏んでると信じてゐるかい？」

「信じてゐます。」
「いや、それを聞いて安心だ。人間は、結局、自分が間違つてゐないと信じ得る生活をしてゐるものが一等福だからね。さアもつと食べて呉れ給へ。今紅茶を入れるから。」

賢太郎は數年前の新之助が、こんなに甚しく變化してゐるようとは思ひがけない事であつた。あの頃の陰氣で無口で人づき合ひの悪かつた新之助が、今は、輕快で明るく要領よく話を進める技術を習得してゐる。そして、あの、落着いて物事を考へる風は、そこにはちつとも認められなかつた。

「貴方も随分變りましたねえ。」と賢太郎は云つた。「俺もそんなに變つてゐるだらうか？」と考へながら。

「五年七年と云ふ時間は人間を變へるよ。君も随分變つた。——君達は——いや君は、東京へ出てから、どんな生活をして來たのかい？ 君の志してゐたやうに、社會がどんなからくりで人間を不幸に陥れてゐるかと云ふ事を學んだのかい？」

「學びました。」と賢太郎は食事を終つて云つた。

「そしてその理由が判つたかい？」

「判りましたよ。」

「ふん。君は、學問をすると云つてたが、何處かに入つたかい？」

「最初、僕は私立大學に入れると思つて凡る努力を拂ひました。所が、大學は、僕等のやうな人間の爲めには門を開いてはゐません。」

「全くだ。そして君はどんな生活をして來たのだね？ この七年の間。」

「工場から工場。これが僕の生活でした。そして、工場と工場の間には、うどん粉や水ばかりの生活がありました。どうして生きて來たか、自分でも不思議な位です。」

「労働運動も随分苦しいだらうね？」

「辛い事だらけですよ。」

「あの事務所は今住んでゐるのだね？」

「いや、今は彼方に住む譯にはいかないのです。」

「どうして？」

「追つかけてられてゐるからです。」

「誰から？」

「×共から。」

「×共つて？」

「事だね？」

「あゝ、さうか、さうか。判つた。それで僕は刑事と間違へられたのだね。はは？ 何

事だね？」

「鐵工場のストライキで——貴方達は反對するでしょうが——少々手荒なことをやつたのです。」

「手荒な事つて？」

「機械を打壊して終つたのです。」

「成程『手荒な事』だね。君達は——いや君は、随分『手荒な事』をやつて来たやうねえ。」

「さうしない譯にはいかないからです。僕は理窟で相手を納得させることは出来ません。何故つて

それア理窟の問題ではなくつて、利害の問題だからです。そして彼等にとつては、その利害も、利潤

の問題ですが、我々にとつては生活そのものゝ問題です。我々は、我々の生活をおびやかす者を生命

がけで敵として、憎み呪ひ戦ふのです。反抗するのです。」

「さうだ、さうだ、君が小さい頃から考へてゐた通りだ。」と牧師は笑ひながら云つた。「云ひ代えれば、その考へから少しも進歩しないと云ふことにもなるな。はつは——」

「進歩してゐないかも知れませんが」と賢太郎は、眞面目に云つた。「併し貧乏人が、金持共に苦しめられてゐると云ふ事では、社會は舊のまゝではないですか。僕が幾らかでも變つたとすれば、僕はずつと貧乏人の爲め弱者の爲めに骨を折らうと考へて居ました。併し今は違ひます。」

「それアどう云ふ意味だらう？」

「僕が貧乏人です。僕自身が弱者の一人です。彼等を救ふのではありません。僕等が救はねばなら

ない。これが、僕の變化です。」

牧師は、賢太郎をみつめた。そして殆ど憂鬱な顔さへした。が、それはほんの一瞬間で、又も職業

的——相手の言葉には引入られぬがさも熱心さうな表情に返つた。だが、その心の中では尙自分

の過去や現在の生活に就いて考へてゐた。中學卒業、神學校入學、拔群の成績、同輩達よりも早く牧

師試験も通り、大きな教會の副牧師を一年務めた後一つの教會を委せられ、三年の後には推選されて

アメリカへ遊學にやられることになつてゐる——。極めて摩擦の少い、それは生活であつた。苦痛と

云ふべき何がそこにあつたらう。學校時代の希臘語の習得と、この教會のヒステリー夫人位のものであつたではないか。

彼は又、富める者と貧しき者の問題に就いて、甥賢太郎と論じ合つた霧の深い朝の堤防の上をも想ひ出した。その時「貧しき者の味方」たることを彼も亦表明したのだ。然るに、その後の彼の生活はどうだらう？ 彼は『偉大な救極』の爲めに戦つて居るとの自負を持つてゐる。これは如何なる仕事よりも榮光に充ちたものでなければならぬ。然も尙ほ今、賢太郎の生活に觸れるとその自負の底に、憂鬱な閃めきを感じない譯にはいかなかつた。

彼は、それを、彼自身のもつと深く強固にされねばならぬ信仰に歸したのである。

四

牧師は、紅茶を入れながら、留置場の事だの、組合の事だの、尾行の事だの、日本の連動——アナキズムとボルシェビズム、反動團體、水平運動等を賢太郎に訊ねたり二三の意見を述べたりした。それは、自分も亦相當その事には氣をかけてゐるのだと云ふ事を示し度いからに相違なかつた。小ブル

ヂョアは、一般にこの種の習癖を持つてゐるものである。併し、運動者にとつては、これ位裏面白くない話は又とあるものではないのだ。それに賢太郎は、もう出掛ける時間が來て居た。彼は、家出以來殆どと云つていゝ位聞かれなかつた故郷や兩親や兄弟の消息を知り度かつた。

「親父から音信がありますか？」と賢太郎は素直に訊ねた。

その瞬間、彼は、何故だか顔を赧らめた。彼自身にも判らない奇妙な感情の閃きであつた。

「小父さんから、始終通信はあるよ。」と若い牧師はミルクをとつて云つた。「ミルクを入れようね？ 皆元氣ださうだ。只だ一寸今問題が持上つてゐるらしいが、大した事ぢやない。」

「親父は矢張り仕事をしてゐるのですね。」

「あゝ、相變らず喉を鳴らしながらね。はつは！ それから、靜ちゃんはお嫁に行つた。小母さんの希望通り商賣人にね。呉服屋ださうだ。もう子供が出來てる頃だよ。皆大きくなつたよ。僕は去年の正月に一寸歸つたが、(其時面白いことがあつたよ) どうしてどうして皆大人だ。君が若し歸つたらそれこそどんなに驚くだらうなア。今度いつか、暇が出來たら一緒に歸つてみないかい？ (賢太郎が黙つてゐるので牧師は續けた) その正月に歸つた時のことだ、どう云ふ譯か、君が歸つたと云ふ噂

があつたと見えて、色んな人達が訪ねて来たものだ。何しろ、今でも君は、東京で勉強してると云ふ事になつてゐるので、——世間の手前小父さん達は一人息子が家出をしたでは具合が悪いと云ふのだらう。所が世間ぢや、君が社会主義者だと云ふことは、ちやんと知れ渡つてゐるんだ——僕は、君とは始終交渉があると云ふ風な顔をして、そんな人達と話をしなければならなかつたよ。嘘をつくの仲々容易な事ぢやない。到頭僕はその爲めに町を出発するの一日早く繰上げた位だつたよ。はつはつは！ 第一に、元警察の小使をしてゐたと云ふ老人がやつて来た。尤もこの老人は何かと云へはすぐやつて来るのださうだ。何かと、息子夫婦と折合が悪くてまるで半分乞食みたいな生活をしてゐるんださうだ。八分所は目的があつたらうが、君の膽玉の大きい事を随分ほめて、君に逢つたら「警察の爺はまだ死ねないでゐる」と傳へて呉れと云つてた。それから、以前小父さんの現場監督をやつてゐたと云ふ片目の髭だらけの人もわざわざやつて来た。この人は町外れで隠居仕事に骨董屋をしてゐるさうだ。片目になつたのは家内さんと大喧嘩した時にやられたんださうだね。云ひ分が面白いぢやないか。この人の——「何も不思議はねえ。あの賢坊は昔から社会主義者でしたわい。まア、餘り激しいことをせぬように、とさう云つて下さい。」面白いのは、山根留吉君と云ふ大學生と、そのお母さんだ。

山根君とは友人になつたよ。其後東京に来てからも三四度逢つた。此處を訪ねて呉れたこともあつたが、まアあんな黙り家もあつたものかねえ。それと反對に、お母さんと來たら、これ位の饒舌屋も先づ珍しいだらう。君を訪ねて來たのに、自分の息子の事ばかり二時間位饒舌り立て、それが濟むとさつさと引上げて行くと云つた調子だ。もう一杯紅茶をあけよう……」

「いや、もう澤山です。」と賢太郎は別の事を考へながら云つた。「両親は、僕が運動してゐることを知つてゐますね。」

「勿論僕は知つてゐると思ふよ。何故つて、君が小さい頃手を引掻いたとか云ふ巡査が、よく小父さんの所へ遊びに來るんだ。この巡査は高等係りの大分いゝ所ださうだ。この男がにや〜笑ひながら僕に、そつとかう云つたよ。「賢太郎氏は、どんな勉強をしておりますかね？」僕は、この海綿面の男が君のことをすつかり知つてゐるんだと思つたので云つてやつた。「君だつて、まんざら親の氣持と云ふものが判らないこともあるまい。」高等係の奴一寸顔を赧らめたが、矢張り「にや〜笑ひながら」さアねえ。まア、宜敷く云つて下さい、あの人に。私ア何もあの人と同じ管内に居る譯ぢやありませんからな。」と云つたよ。」

「あん畜生の面炮面が見えるやうです！」と賢太郎は云つた。「きつと、彼奴は親父に色んな事を話したに相違ないです。」

「まアさうだらう。『隠れたるに現れざるはなし』だ。第一君は何も『隠れたる』運動をしてゐる譯ぢやないからね。」

「僕は、もう時間が來ましたから失敬しますよ。」と賢太郎は立上つた。「親父に何卒、手紙をやつて下さい。僕が、親父に——親父を、さうだ僕は親父の安心するやうな仕事をしたいと度々思ふ位です。いや、僕の氣持は、うまく僕には云ひ現せないです。宜敷く云つてやつて下さい。只だ、僕が眞面目に戦つてゐるんだとだけでも云つてやつて下さい。」

「あゝあゝ、僕には君の氣持がよく判るよ。まアいゝぢやないか。何だつたら此處に泊つていつてもいゝんだから。そして君はこれから何處へ行くんだ。夜が晩になると誰何されて、捕まるかも知れないぢやないか。」

「僕は失禮します。仲間と連絡をとつてゐなければなりません。何れ又出掛けて來ます。もう少しの間僕は捕まつては都合が悪いんです。多分半年位別荘に行くことになるでしょう。その前にもう一度

來られたら來ます。ぢや御大事に。御邪魔しました。あゝ、それから、金を貸して貰へませんか。僕は、貴方がどんな生活をして居るか知りませんが、若し、何とかなるんだつたら……」

「あゝ、いゝとも、僅かしかないが、何時でも入用な時があつたら來て呉れ給へ、あればきつと何とかするからね。」と牧師は机の抽出から募口をとり出した。「僕が、君につくすとしたらこんな事位のものかも知れない。ほんの少しだが——、僕は、電車の停留場まで一緒に行くよ。一寸話し度いことがあるから。」

牧師は、募口の中の銅貨も一緒に十圓餘りを甥に渡した。それが彼の募口の全部であつた。彼は、絶えず、自分の生活の事を想つてゐた。何故なら、彼の研究題目である『原始基督教會』の信者達の張り切つた生活が、そこにはなかつたからだ。

電車停留場までの間、新之助は、賢太郎を驚かせる話をした。

「僕は君の氣持を攪き亂すことを知つてゐながら、こんな話をしたんだ。話さない方がよかつたかも知れないが、そんな事はセンチメンタリズムだ。」

「有難う。」と賢太郎は答へた。「何か、さう云ふ事があるだらうと僕は考へてゐましたよ。僕は一層、

ブルジョアジーの仲間を憎む心が強くなるばかりです！

妹の鈴子の縁談が、社会主義者賢太郎故に、破れたと云ふのであつた。そして、彼女は、毒を嚙んだ。生命は取止めたが、性格は一變した。内氣な妹が、この東京に来てゐて自棄糞な生活に身を投げ込んでゐる。

「君に責任があるとは思はない、僕は……。」と牧師は云つた。「何故と云つて、鈴ちゃんは、愛してゐたその大學生——郵便局長の息子金田と墮落ちまでして來たのだよ。僕が思ふに、金田は、鈴ちゃんにもう飽きたんだ。確かな話によると、山根君も知つてゐるが金田は女たらしの仕様のない奴ださうだからね。で、まア別れ話のいゝ種に、君の事を持つて來たのだと思ふんだ。」

「鈴子は、今何處に居るのです？」と賢太郎は、電車がやつて來るので大急ぎで訊ねた。「僕は逢ひ度いなア。」

「今晚泊つて行けないかい？」

「さうしましょうか——」

「未だ話す事があるよ。」

電車が來た。

「僕は、爭議が解決したら、すぐ來ます。妹に逢えるようにして下さい。」と賢太郎は昇降臺から云つた。

「待つてゐるよ。あんまり心配しないように—— さよなら！」

夜更けの電車は、忽ちスピードを出した。車掌臺からもうずつと後の新之助に賢太郎は叫んだ。「色々有難う。」

五

財界不況から來る資本家共の攻勢に對して、労働者達は、惡戦苦闘を續けてゐた。その結果は、多くは、労働者達の敗北に歸した。資本家共にとつても、それは彼等自身の死活の問題であつたのだ。組合の統一、共同戦線の氣運は、次第に濃厚になつてはゐるが、「サンチカリズム」と「ボルシェビズム」の二つの流派があつて、「大衆の要望」を度々阻んでゐるのであつた。併し、可能な範圍に於ては、各所に、組合の同盟會、聯合會が結成されてゐた。賢太郎の屬する鐵工組合も亦この階級的な運動の

有力な單位であつた。

賢太郎は組合幹部の一人として、多くの會合に出席しなければならなかつた。一方、ストライキは各所に起つてゐた。彼は、彼の組合の存立問題にかゝはる巨鐵工所のストライキに、自から立つて機械破壊者となつたのだ。

彼は、多忙を極めた生活の僅かの時間を割いて、その親戚を訪ねることができた。そして、その訪問は、彼の心に今一つの荷物を背負はしたのであつた。

「行かなければよかつたんだ——」と賢太郎は「後悔」しながら同志の家へ裏から入つて行つた。仕事を待つてゐる二人の同志は眠つてゐた。

「變つた事はなかつたかい？」と未だ起きて手紙を書いてゐた同志Aに賢太郎は訊ねた。

「別に變りはないが、君ア氣をつけたがいゝぞ、大分方々搜してゐるんだからな。親戚の家は判つたかい？」

「うん。判つたよ。——だが、判らない方がよかつたかも知れない。」

「いやに陰氣だな。どうした？」

「俺にア、どうも戀愛と云ふ奴が判らねえんだよ。」と賢太郎は帽子を投げ出して云つた。

「何だと？ 女が出来たのか？」とAは失笑して云つた。「この野郎！ その親戚の娘か？ 判らぬ事ア何でも聞け、戀愛に關する範圍なら俺が指導してやるよ！」

「冗談ぢやねえ。僕の妹の話だ。」

「妹がどうした？」

賢太郎は話した。Aは、すぐ昂奮する性格であつたので、話を聞終るとプロレタリアと結婚に就いて一席辯じ立てた。そしてもう僅かになつてゐる一升瓶を持つて來た。

「一杯やれよ。心配するこたアねえ。きつと君の妹は、婦人闘士になるよ。最初から戀愛に成功するやうな女はどうせ人間の屑だからな。實はな今、俺は手紙を書いてゐるんだ。この女も矢張り成功しなかつた方だ、一寸いゝ女だぞ。俺アきつとこの女を闘士にして見せるよ！」

賢太郎は、郵便局長の息子を半殺しにして呉れる心算だと云つた。「賛成だ！」とAは一升瓶から自分ばかり飲んで了つた。「何處に居るんだ、その大學生の野郎は！ テロなら俺も一口入るぞ。」

賢太郎は、Aと相談して、自分の間新之助の家へ隠れ度いと云つた。Aも反対しなかつたが、只だ
餘り外に出るのは危険だと主張した。

新之助の教會への路を、Aに教へてゐる時、表の戸を叩く者があつた。

「氣をつける——」とAは、地圖の書かれた紙を丸めて捨て、云つた。「路は判つたよ。裏に出て様子
を見てから行くがいよ。大事をとつて、あの路から。誰だい！」

Aは、賢太郎が裏口をあける音を消す爲めに障子をガタガタ鳴して入口へ出て行つた。「大聲で話を
したのが悪るかつた」と思つた。

「誰だい、今頃——？」

戸の外で聲がした。

「この夜更けに、いゝ加減にしろ！」とAが叫んだ。「明日の仕事のある者が寝てるぢやねえか！
甘く見やがねえ！」

賢太郎はそれを聞いた。そしてAから教へられてゐる通路でない通路を通つて、広い屋敷の塀を乗
越えた。彼は、植込の間をぬけて又も塀を越え電車通りに出た。彼は終電車に間に合はなかつた。彼

は、教會まで歩いて行く危険を感じた。さう云ふ時に過す夜を、賢太郎は過した。

六

新之助の熱心な斡旋に係らず、妹は、兄に逢ふのを拒絶した。

「どうして生活してゐるか判らない——」と牧師は云つた。「僕が行つた時若い男達が三人居たよ。」

「鈴子は、矢張り僕をうらんでゐるんですね。」と賢太郎は云つた。「それア當然かも知れない。——僕
は、行つて来ましよう。一人で——」

色眼鏡をかけた賢太郎は、中央線沿線の郊外の停車場に降りた。そこは、空氣が澄んで樹木の爽か
な臭ひがした。

その家は、森の中にあつて、森中に響く笑聲が、地圖に書かれたその家から聞えて來た。

賢太郎は、小さくないその屋敷を見つけた時、胸が痛んだ。涙が腹の底から滲み出して來るやうな
氣がした。彼は色眼鏡を外しながら、兄妹のうちでも鈴子が一番愛してゐたことを思ひ出した。

「俺は、妹から憎まれに來たんだ」と彼は思つた。「鈴子が、俺に責任があると信じてゐるなら、俺

を憎むのは當然の事だ！」

洋風の扉には鍵がかゝつてゐた。ベルの釘子を押したが何の返事もなかつた。彼は、扉を叩いた。扉がぱつと開いた。

「誰？」と女の聲がした。

賢太郎の前には、妹の幼顔を持つた女が立つてゐた。まがふ方もないそれは妹だ！ タオルの寝間着を着た、すらりとした妹は、兄を見つけて突立つた儘身揺ぎもしなかつた。見る見る彼女の顔は眞赤になつた。

「俺だよ。」と賢太郎は低い聲で云つた。「邪魔か？」

「来て下すつたのね！」と妹も低い乾いた聲で云つた。それは、彼女の云はんとする言葉ではなかつたに相違ない。

「俺は、お前に逢ひ度かつたんだ。」

すると、彼女はにたりと笑つて顔を伏せた。そしてきやいやな手を組み合せてねぢ曲けた。それは凡て彼女の心の混亂を示すものであつた。

「話し度い事があるんだ。」と兄は續けた。が、その聲は、妹に對する親愛の情の爲めに震えを帯びてゐた。

「お前は、俺を憎んでゐるだらうなア……、お前が俺に責任があると思ふなら俺を憎んで呉れ。それ

アお前の権利だからな。」

「誰も憎んでやしないわ！」と妹は、せめて自分の聲で云つた。

「何だ何だ何だ！」と男達が廊下をどたくと鳴してやつて來た。鈴子は、いきなり振向いて、叫んだ。男達は静かになつた。

「あんた達の出る幕ぢやないわ！ あたしの兄さんが來て呉れたのよ。静かにして頂戴！——あんた達の一人が誰でも、あたしの兄だつたら、あたしは唾液をひつかけて歸しちまふんだ！ 兄さん、何卒上つて下さいな。關はないの。そして、あたし兄さんの話を穏和しく聞いわ。さア、此方へ、この部屋で一才待つて、下さいな。火を持って來ますわ。それに、あたしこんな風をしてるんですもの直ぐ來ますから一寸待つて、ね。まだ十一時にならないでしょ、あたし十一時になつたら仕事に出なければならぬの。」

賢太郎は、その二坪ばかりの西洋間の椅子に腰を下した。滅多に人の入らない部屋らしい。被ひのない丸卓子の上には埃が溜り、四脚の椅子の一つは倒れたまゝであつた。壁紙は色褪せ、方々に染みや破れがあつた。そして、ドイツビールのポスターと並んで、譯の判らぬ油絵のなぐり描きが掛つてゐた。

間もなく扉があいて、鈴子は、石油ストーブを提げて入つて来た。彼女は一見してその職業を明かにしてゐる派手な着物を着てゐるばかりでなく顔には厚い化粧さへしてゐた。

「兄さん。あたしね、あの牧師さんが何故だか嫌ひなのよ。」と彼女はストーブを加減しながら云つた。「それで、あの人が来た時、『餘計なお世話かい等しい方がいい』と云つてやつたの。えゝ、さう云つてやつたわ。あんな人はどうして、自分はお前達と違つて善い人間だぞと云はぬばかりの顔をしてゐるのでしょうか。でも、あたし兄さんが来て下さると信じてゐたわ。そして、兄さんが来て下さつたら何と云はうかと云ふ事まで考へてゐたのよ。するとどうでしょう、兄さんとばつと顔を合せた時に何もかもおぢやんになつて終つたの。」

「お前の云はうと思つてゐた事を、すつかり俺に云つて呉れないか？」と賢太郎は、すつかり大人になり切つてゐる妹を見下しながら云つた。「俺は話があつて来たと言ふよりも、お前の話を聞きに来たのだからな。話して呉れ。もうストーブは大丈夫だよ。俺は寒くはない。」

「あたしね、兄さんが見えたら『何しに来たの！』と云はうと思つてたの。『さう云ふ人には用事はなない！』と誰かに云はせようとその次ぎには思つたの。それから、皆で兄さんの前で笑はうとも思つたし、兄さんが怒りさうな事をしてやらうとも思つたの。でもあたし昨日から考へを變へましたわ。そしてね、あたしはね、すつと先刻までその決心で居たわ。扉がとんとんと鳴つた時あたしはきつと兄さんだと思つて、そのつもりで出て行つたの。あたし、兄さんの前に坐つて『助けて下さい、兄さん！』と云はなげやならなかつたのだから。それに、あたしは、どうしてもそれが出来なかつたの。何故つて、それアあんまり、本當過ぎるあたしの心だからなの。あたしには、そんなに眞正直になれない癖がついて来たの。それに、兄さんを一眼見た時、そんな事を云はなくても兄さんはあたしを助けて下さるに相違ないと云ふ氣がしたので……」

「鈴子、その椅子に腰をかけたらいゝぢやないか。」と賢太郎は、妹に云つた。「俺に出来ることならどんな事でもする。」

鈴子は兄に従つて椅子についたが、その顔は蒼褪めて涙にぬれ、新しい涙が彼女の自から意怙地に嘗めて来た一切の苦しみを流さうとするやうに次ぎ次ぎに溢れた。

「あたしを、こんな所から連れ出して下さい、兄さん。」鈴子はもう遠まはしに自分の感情を打開けようとはしなかつた。「あたしは兄さんについてゐて貰つたら、こんなだらしない生活に落ち込みはしなかつたと思ひますわ。若し、あたしが兄さんを悪く思つてるとしたら、あたしが一等悲しかつた苦しかつた時に、兄さんはあたしに居所を知らせて下さらなかつた事だわ。もうそれも過ぎた事だから何でもありません。——あたしは、生れ變り度い！ 兄さんはあたしを生れ變らせて下さると信ずるわ！」

賢太郎は、荒々しい昂奮の爲めに思はず立上つた。若し、そこに、郵便局長の息子でも居たとしたら、彼は立所に大學生の息の根を止めたに相違ない。彼は、狂暴な心を止めようとはしなかつた。彼は、大學生の事と同時に、自分が間もなく——いや直ぐにも、ブルヂョアの××に捕へられて監獄に叩き込まれることを考へてゐたのである。

「捕まるまで！」と彼は自分に叫んだ。「どんな事でもして鈴子を此處から連れて行かう！」

七

賢太郎が捕つたのは、それから三日目の夜であつた。彼は、その夜、妹との生活に必要な金を作りに組合長松田の家を訪ねたのだ。

「僕の家に来て来たらどうだ？」と、松田は親分氣を出して云つた。「二人で家を持つのもいゝが、どうせその仕事はやらなければ食つていけまい。さうすればどうしても眼立つて君が危いぜ。妹は僕が引受ける。君は、まア當分消えてゐた方がいゝ。書物でもみつちり讀むさ。」

賢太郎は組合長の言葉通りにしようと思つた。個人の問題に就いて、運動者としての自分を輕んずると云ふことは恥づべきセンチメンタリズムであつた。組合長の言葉は若い彼に對する婉曲な警告であつたのだと、通りに出た時彼は氣がついた。彼は歸る時松田が呉れた金をポケットの中で攔んで、運動の爲めには一切の事を犠牲にするんだと、今更らながら心に誓つた。

ふと、彼は後から来る洋服の男に氣がついた。

「危い！ 妹に一寸逢つてから！」

彼は、この二つの事を同時に思つた。
横丁に外れると同時に、彼は走つた。

「泥棒だ！」と後で叫んだのを、賢太郎は聞いた。彼は素早く横路へ横路へと外れては走つた。

袋小路で、彼を最初に捕へた男は、魚の臭ひがした。賢太郎は、肴屋を思ひ切り地面に投げつけた。

「馬鹿野郎！」

彼は、さう呶鳴つて振返へつた。二人の刑事が、多勢の野次馬の中から近づいて来て云つた。

「到頭、搦つたね？ 大河君！」それは組合によく顔を出してゐた刑事であつた。

「繩を打たうか。」と今一人の刑事が云つた。

「それには及ばないよ。はつは！」と最初の刑事が云つた。彼は、自分の手で賢太郎を捕へ得たことが悦しくて耐らなかつたのだ。「ね、大河君、繩は打つには及ばないぢやないか。さ、行かうぜ。いやどうも皆さん御苦勞でした！」

野次馬は路を開いた。

賢太郎は、歩き出しながら煙草に火をつけた。

「當分、煙草は吸へないな。」と刑事が云つた。「もう、しかし、搦まる心配はないから、留置場でぐつすり休むさ。安心してね、はつは！」

賢太郎は、妹の事を想ふまいとして咳拂ひをしつゝけた。何か他の事を考へようと思つた。

「ふん、あつさり捕つたな。」と彼は心で呟いた。「時候は悪くもねえ——」

彼は、煙草を撮んだ手に魚の臭ひがしたやうな氣がした。彼は幾度も嗅いでみた。

「態ア見ろ！ 痛い目を見やがった。」

そして、又も妹の事を考へ續けた。

「俺が側について居なければ、あれは、又元通りに泥沼にはまつて終ふかも知れない。折角、あれは、一生懸命に生活を改革しようと思込んでゐたのになア……」

彼は又、自分が、個人的な問題で搦まつたと云ふ事を想つた。これは、重大な過失であつた。彼は同志達に顔向けのならぬ裏切りをやつたのだと、自分を罵つた。殊に、同志A——は、自分に對して、

幾度注意を與へて呉れたことだらう。

併し、彼は、尙ほ妹の事を想はずにはゐられないのであつた。運動は、自分なくしても進められ

るんだ。自分の存在など物の數ではないではないか。だが、妹はさうではない——。

警察署に着いた。

彼は、最後の煙草を半分吸つて、刑事に守られながら地下室に降りて行つた。

第七章

一

疑ひ深くなつた、自分を、賢太郎は意識した。僅か八ヶ月の苦役が自分に意識出来る程の心の變化を與へたことと、彼は闘つた。彼は、妹が再び自暴自棄の生活に沈んでゐる事を確く信じた。ずつと前面會に來て呉れた、牧師や幼友達の山根の口振りから彼に隠してゐる事を想像した。しかし、耳新しい事であり、彼を力づける事は、山根と鈴子とが、愛し合つてゐるらしいとの牧師の言葉であつた。これは、彼を慰めたが、彼の心は、この戀愛の破綻を想像していらいらする方が多かつた。一方彼は、個人的な事から捕えられたと云ふ激しい責任を感じた。同志達は、そんな事は云はなかつたけれど、彼はその言葉の裏の裏を考へつゞけたのであつた。

彼が娼婆に出て來たのは、捕えられてから八ヶ月目の夜であつた。

師走の寒い風がヒウヒウ鳴つてゐた。

彼が、刑務所の耳門から出て来ると、三時間近くも待たされた同志達が喊聲をあげて彼の周りに駆け寄つて来た。

「寒かつたらう！」

「やア大河君！」

或者は彼を抱き締め、或者は彼の手を握つて振つた。

「萬歳！」

「體は大丈夫だつたかい？」

「御苦勞だつたな！」

「俺達ばかりぢやない。彼所に、大河君の親戚の人達が来てゐる——」

賢太郎は、妹が来てゐるのだと思つた。

彼が未決に居る時、誰よりも早く面會に来た鈴子は出獄の日にはきつと仕事は休んで出迎へに行くと言つたのだ。彼は又思つた。「鈴子が、山根を愛してゐるとすれば、素晴らしいことだ。彼女はもう大

丈夫たらう！」

同志達は「親戚の人達」の爲めに、賢太郎から離れた。

暗闇の中に立つてゐる三人のうちの背の高い男は、思ひもかけぬ父親の姿であつた。「八年振りの面會だ！」と賢太郎は心の中で叫んだ。

息子は、突立つた儘荒々しく髪を掻きあげた。そして、近づいて来る父親に頭を下けて云つた。

「出て来ました。」

父親は、咳拂ひをして、背いたきりであつた。

「やア、暫く——」と牧師は云つたが、彼は、何だかそぐはない言葉に氣がついて云ひ直した。「六時には出られると云ふ事だつたが——かう云ふ役所はどうも手間がとれるねえ。」

「俺ア、一昨日、上つて来た。」と父親は息子に云つた。「一昨日から、ずっと新之助の所に邪魔になつてゐる。」

刑務所の門燈だけの明るみであつた。それでも尙ほ明る過ぎると云ふ風に、父親は外つ方を向いては、チラチラと息子の方を見た。

「御心配をかけました——」と賢太郎は云つた。
「かう云ふ所では仕様がねえ。皆さんも一緒に何處かへ行かうぢやねえか。皆さんは、腹を減らしてゐなさる……」

父親は、さう云ふと激しい咳拂ひをして歩き出した。

「あの人達は、労働組合の人達かい？」と山根が、そつと賢太郎に訊いた。

「あ、山根君、暫くだつたなア。」と賢太郎は、努力した大きな聲で云ひながら幼友達の手を握り締めた。「さうだ。あれは皆、僕の同志達だ。」

「君も矢張り、あんな自動車で、此處に搬ばれたのかい？」

「あんな自動車つて？」

山根は黙つた。「これは又何て下らぬことを俺は訊くのだらう！」と彼は胸のうちで呟いた。彼は、鐵の扉の中へ幾度も入つて行つた、陰氣な囚人自動車の明り取りから、眼だけを出してゐた囚人達の事が忘れられなかつたのだ。

「妹は、どうして來なかつたのかい？」と賢太郎は訊いた。

「昨日、僕は逢つた。必ず來ると云つてたが……」と山根は吃りながら云つた。「卒直に、僕の考へを云へば、お父様に逢ひ度くないからぢやないかと、僕は思ふんだ。」

賢太郎は、暗然として黙り込んだが云つた。

「鈴子は、君を愛してゐるに違ひない——」

「僕は、僕は——あの女を愛してゐるんだ！」と山根は昂奮の爲めにきれぎれに云つた。

賢太郎はふと氣がついて、同志達の方へ聲をかけた。

「皆、どうもこの寒いのに濟まなかつたなア。行かうよ。」

同志達は、やつて來て、彼の耳に囁いた。

「君の親父だつたのかい？」

「親戚だとばかり云つてたもんだよ。」

「さア行かう。」と一人の同志が云つた。「松田氏は今大阪の方へ行つてるんだ。君の出獄の爲めにと云つて、出發する日に僕にこれだけ金を呉れたんだ。皆で、出獄記念をやるようにと云つてね。組合では、もう用意がしてあるんだせ、君の親父さんも來て貰へるといふんだがなア。」

牧師が走つて来て、賢太郎に云つた。

「是非皆さんと、そこいらで夕飯をつき合つて貰ひ度いと、小父さんは云つてるんだよ。」

「困つたな——ぢや、かうしよう。」と同志の一人が云つた。「茶でも一杯御馳走になつて、早く組合に引上げよう。でないと、待つてる者に氣の毒だからなア。」

電車通りのそば屋の二階に、一行は上つた。皆が席に就くと、女中が生豆腐を持つて上つて来た。牧師はそれを受け取つて、賢太郎へ持つて来て云つた。

「賢太郎君——小父さんが、これを、君に食べろと云つてるんだよ。何でも、これが毒けしになるんださうだ——」

賢太郎は黙つてそれを食つた。皆も黙り込んで終つた。

すると、突然父親は、大きな咳拂ひをして居住ひを直した。そして、一言御挨拶申上げ度いと云つた。

「私は、大河賢太郎の父で御座います。これは、私の一人息子で御座います。これが、家出をした時には、私は耻しながら男泣きに泣きましたが、古い話ばもうそれは済んだことで御座います。くよくよする事は、私の性分に合はねえ事で御座んすので——」

二

「まア、何よりも、この寒い時に、これの爲めにわぎわざどうも、出迎えに與りまして何ともはや御禮の申上げようも御座いません。」

「私は、これが今日出て来る知らせを受け取ると直ぐ、一昨日上つて来た次第ですが、私は、これの母親と確く約定をして来たので御座ります。それは、外でも御座いません。これも、監獄の——刑務所の門から直ぐ様引連れて家へ歸ると云ふ約定で。そんな事が出来るにせよ出来ないにせよ、私共の心持は、全くこれで御座りました。私も、その決心で参つたような次第で御座います。實を申せば、ほんの先刻まで、私はその心算をして居つたので御座います。いや、今でも、矢張り、これを連れて歸り度い氣が致して居りまする。」

「所が、先刻、あの吹きざらしの門の前で、私は皆さんの話を凝と聽いてるうちに、考へが變つたので御座います。」

「第一、私は皆さんがどんな考へを持つて居られるかまるで存じませぬ。世間の口姦しい噂などはあてになるものでは御座いませぬ。それかと云つて、それを研究して見ることも仲々私共には出来ぬ相談で、つまる所、私共は、皆さん方の考へを、正直な所まるで知らないで御座ります。私共にすれば、位もあり名譽もある方々とか、警察とかが反對をしてるので、自然に、あんな風に云はれるかには、碌な事ぢやあるまいと云ふ按配に考へて居るのですが、正直な所、何事も私共は存じませぬ。それに、位もあり、名譽もある方々から警察に到るまで、地位や名譽や役目に耻しからぬ行ひばかりかと云へば、私は自分でよく見て知つて居るから云ふのですが、私共のやうな無學な賤しい稼業をしてゐるものでもない悪い事やつてゐるので御座います。」

「で、私が、これを是が非でも連れ歸らうと云ふのは、只だもう世間の口がうるさいからで御座います。私は商賣柄、若い頃から人を人とも思はず監獄位が何だ、世間の奴が何と云はうが——と云ふ按配に思つて來たのですが、年をとるに従つて、(年はとりたくないもので御座います) 矢張り世間のうるさい口には負かされるので御座います。」

「私は、皆さんの話を聞いてゐるうちに、はたと考へが變りました。それは、「俺がこの人達と同じ位に若かつたらどうだらうか」と云ふ事で御座いました。『俺は、矢張り、こんな風に仲間同志で人が何と云はうと元氣にやるに違ひない。』と私は考へました。何事も穩便にと思ふのは、年をとつてからの事で御座います。若い男には、若い男同志の世間がある。その世間から若い男を、どうして年寄りや女の世間に連れ歸ることが出来ましよう。世間が姦しいと云つて、年寄りや女の考へ一つで、もう一人前の若い男をどうかうすると云ふ權利はない。産みの親の育ての親のと、若い者に恩をきせるのはそれは親の我儘や慾心からで御座います。親は親の代、子は子の代——親子の情愛はこれとは、又別な話で、權利でも義務でも義理合ひでも何でも御座いません。只だ人間の自然な心で御座います。それでこそ親子の情愛で御座ります。」

「子供の方の立場からすれば、これが家出をしたことも何もかも一切あたり前のことで、私が若ければ矢張りさうするに違ひない事で御座います。何んな事でも、皆さんは良いと思つた事を、どんどん腹一ばいなさるがいで御座います。併し、親の方の立場からすれば、年はとつて居り、心も若い頃のやうに活氣がないので御座いますから、色々の愚痴が出たり、世間がうるさいと云つては、親の權利を持出したくなつたり致します。これは、致し方のない事で、親とすれば、又あたり前のことで

御座います。

「私は、口無調法で、思ふ事が十分云へませんが、私はもう決心致しました。これからすぐ一人でAの町へ歸る心算で御座います。皆さん方も、皆それぞれ親御をお持ちで御座います。出来る事なら、餘り心配をかけぬやうにやつて頂き度く思ふのです。いやいや、これも私の愚痴で御座います。只だ、老先き短い親御の心も時には察してあけて下さい。これだけです。何卒、まあ、皆さん方は仲間喧嘩をしないように、思ひ通りにやつて下さい。おや、賢太郎、お前方の寄合ひの方に行つて呉れ。俺は餘計な事を云つたかも知れないが、これも俺にして見れば決して悪い考へがあつての事ぢやないんだ、許して貰はうよ。元氣で暮すがいい。俺や家の事を心配するな。なアに、若いうちに暴れるだけ暴れるがいいんだ！俺もなんだか若やいだ氣がして來た。世の中の事で、知つて悪いことア一つだつてありアしないからなア。——」

父親と牧師、山根の三人を残して皆と一緒に通りに出た時、賢太郎は、ほろほろと涙を流した。同志達も皆黙つて歩き續けた。

自分の事を、永い間一生懸命に考へ續けてゐた父親のおふれるばかりの『情愛』に、彼は激しく打

ち叩かれたのであつた。それは、父親の云ふ通りに、權利・義務・義理合ひ——其他一切とは別な、心の發現であつた。そして、それは、「古い規範」を以つてしては、解釋することの出來ぬ新しい「情愛」の萌芽であつたに相違ない。

同志達は、娑婆に出て來た同志に、色んな運動の狀勢を話し度かつたし、何よりも、この一本氣で勇敢な同志の活躍の爲めに激勵の言葉をかけ度いと思つた。併し、誰も、黙つてひどく陰氣に歩き續けた。

停留場に來た時、牧師がやつて來た。彼は、賢太郎を時計店の飾窓の所まで引張つて行つて囁いた。「小父さんは、今晚歸ると云つてるが、僕は、どうしても今晚は泊めて置くよ。ね、判つたね。さアこれは、電車賃だ。おや、ね、判つたね——」

賢太郎は、掌の中に押込まれた、五十錢玉を凝つとみつめた。彼は、自分の「運命を決する」何かを、その白く光つてゐる銀貨が持つてゐるのだと云ふ風に感じた。彼は到頭云つた。非常に苦しうに。

「僕は今晚は、多分行けないでしょう——。行きませんよ。親父に何卒宜敷く。」

「何を云つてるんだらう、君は！」と牧師は吃つて云つた。「いや、君はきつと来るよ。きつと——、僕達は待つてゐるよ。さア、組合の人達の所へ行つて來給へ。そして、僕の義務も果たさせて呉れ給へ、頼む。」

牧師は去つた。

賢太郎は、組合事務所に着くまで、五十錢玉を握りしめてゐた。

三

「——もう四五日も、小父さんが逗留して下さるといふんだがなア。一三日もすれば、新しい教會に移轉し出来るのですがねえ——」

牧師の家に三人が歸つて來て、牧師は火をおこしながらかう云つた。

壁の乾くを待つばかりになつてゐる、新しい教會堂と牧師館とは、新之助の設計になるもので、内心得意であつたのだ。それを、彼は、『小父さん』に是非見せ度かつた。併し、『小父さん』はそんなことに氣の向く筈はなかつた。昨日丸る一日、この『不幸な』父親は茶の間にほんやり坐つたきり、大

きな咳拂ひをし煙草を吹かしつゞけて一日を過したのであつたとは云へ、牧師は、今晚出發つと云ふ『小父さん』を到頭引留めることに成功したので氣がひどく樂になつてゐた。彼は、賢太郎も、必ずやつて來ると信じてゐた。兎に角、親と子が八年間交渉が絶えてゐたのであつた。そして、八年目に、彼等は、やつと逢ふことが出來たとは云へ、それは、世間並に云へば餘りに『不幸な』面會であつた。しかも、親子は、二人だけでしんみり話し合ふ機會を得ずに、又も別れて終つた。そんな事が出来るものぢやない。自分が居て、そんな馬鹿な眞似はさせない、『情にしのびぬ』と彼は心の中で思つてゐたが、それよりも偶然、彼がああ停留場で賢太郎に云つたやうに、彼は『義務』を感じたのだ。さうしては牧師ともあらう自分の役目が立たぬ。兎に角に二人を、もう一度合はせよう。二人とも、口では強いことを云つてるが、心の中では、もう逢ひ度くて逢ひ度くてたまらないのだ。親子ぢやないか。人間同志は、ほんのちよつとしたきつかけで取かへしのつかぬ結果を來たすものだ。二人はそのきつかけを心ならずも、見す見す逃がさうとしてゐるのだ。此處に自分が居る。さうはさせない。牧師の氣持は、こんな風であつた。彼は父と子の各々が、互に心に決して別れて來たのを、再び逢はせると云ふ事が、二人にとつてどんな結果をもたらすか？ それを彼は考へてみやうとも思はな

つた。何故なら、牧師にとつては、永い間別れてゐた親子が逢ふと云ふことそれ自身が何物にも勝つて『美しい』からであつた。悪くすると、彼は、キリストの譬話『放蕩息子』を思つてゐたかも知れないのだ。

「さア、火が起りました。寒かつたでしょう、……」と牧師は云つた。「神経痛の方は、どうですか、」
 落着いたら、皆で風呂で温つて来ようぢやありませんか。今、紅茶を入れますからね。」

「もうかまはないで呉れ。」と父親は云つた。

「なにもおかまひが出来ないですよ、——小父さんがもう少しゆつくりしてゐて下さるといふんです
 がねえ。」

「師走だ。」と父親は咳拂ひをして云つた。「山根さん、さア火鉢の方へお出なさい。御兩親の方からた
 よりはありますか？」

山根は、自分に聲がかけられたので、顔を赤くして云つた。

「はア。」

「早く、大學を出て、御兩親に安心させておあげなさいよ。」と父親は云つた。貴方ばかりをたよりに

してゐられますからな。」

「矢張り僕も——いや僕は——」と山根は吃りながら云つた。「僕は、自分の信念通り……僕はつまり、
 弱い人間です。苦しいです。」

山根は、さうは云つたが、我ながら、譯の判らぬ事を云つたのに氣がついて、一層狼狽えて云ひ續け
 た。

「僕は、先刻の、貴方のお話を聞いてゐて、非常に感動したです。こんな立派な親もある！と思ふ
 と涙が出ました。僕は、色々な事を考へました。僕の兩親は、貴方のやうに立派な親ではないです。
 しかし、立派でないと言ふのは、つまるところ、兩親が、非常に貧乏で、僕ばかりをたよりにしてゐ
 るので、立派な氣持を持つだけの餘裕がないからなんです。かりに僕が、賢太郎君のやうに、眞理に
 忠實に行動するとしたらどうでしょう！（え、さうです、僕は現在眞理に背いた生活をしてゐるの
 です。）忽ち、明日か明後日、本當に飢ゑ死にして終ふのです。僕が眞理に背いてゐるのも、兩親が立
 派でないのも、皆、貧乏の爲めです。その貧乏が、労働者や百姓の貧乏とは違ひます。小學校の教師
 と云ふ職業の爲めです。労働者や百姓よりもひどい貧乏の爲めです。それに又、親父はもう若くはあ

りません。世の中のどんな者でも、僕の親父程、卑屈や臆病で惨めなものはありますまい！ それはあたり前のことなのです。それでゐて労働者や百姓よりも、遙かに高級な職業だと思ひ込んでゐるのですからねえ！——」

「私は思ふに——」と父親は静かに云つた。「山根さんにしても、賢太郎にしても、一態に近頃の若い者は、物事を考へ過ぎるやうな氣がするです。併し、それも時勢がさうだとなれア、これアもう何とも致し方はない。」

牧師は紅茶を入れて持つて來た。

「時勢ですよ、時勢ですよ。」と牧師は笑ひながら云つた。「私だつて、賢太郎君や山根君と同じ年頃だつたら——只つた六七年の相違ですが——矢張りさう云ふ風に考へたかも知れませんが、六七年——この六七年の爲めに、私は、自分が古い人間、つまり小父さん達の時代に屬してゐるに、さりとて賢太郎君や山根君の時代にも屬してゐないと云つた氣がするのです。」

「さうかも知れませんが、『時代』と共に職業です。其の他に色々な關係があると思ひます。」と山根は云つた。

其の時、突然、庭の方で足音がして、人聲もしたやうに思はれた。牧師は大急ぎで部屋を出て行つた。山根も、その後につゞいた。

部屋に残つた父親は、煙草を火鉢の灰の中に突き込んで、耳を澄ました。彼の日にやけた顔は、異様な緊張で、瀬戸物の火鉢のやうに輝いた。彼も亦、賢太郎が、或ひはやつて來るかも知れないと思ひつけてゐたのだ。山根が、あわたゞしく部屋に入つて來た。彼は、昂奮してゐた。顔を眞赤にしてゐた。火鉢の前に坐つたが、それでも、賢太郎の父親が、來たのは誰かと聞かうとしないので、到頭乾いた聲で囁いた。

「小父さん、鈴子さんが來たのです。あの女は——、え、貴方はあの女を憤つてはいけません。貴方の氣持をお察しますが、あの女の氣持も察してあげて下さい。決して、決してあの女を憤らないで下さい。きつと、あの女は、よくなりますから……僕は、そして、僕達はあの女をよくしますから——」

四

山根が言葉を終らぬうちに、廊下に足音が起つた。併し、不幸な父親は、背の方になつてゐる扉の方へは顔も向けず、凝つと火鉢を見つめたまゝであつた。只だ、火鉢の縁を押えてゐる手は、絶えず細かく動いてゐた。

「——もう來ますよ。直ぐ來ますよ。賢太郎君は一寸他に廻つてゐるのです。同志達の歓迎會にね。」と云ひながら牧師は、ひどく酔つてゐる洋装の鈴子の腕を抱いて部屋に入つて來た。

「私は、何か他人様に、善い事をしているとと思つてゐるやうな勿態ぶつた人は大嫌ひよ！」と鈴子は部屋に入るや否や牧師の腕を振りひのけて云つたが、そのまゝそこに潰れ込んだ。洋装の何處かゞビリビリと破れた。

「えゝ、えゝ、貴方達は皆立派な男ですよ。でもね、貴方達が立派なのは、只だ運がよかつたからぢやないの？ 冗談ぢやない、だから立派な人は、立派でない不運な人を哀れむ權利なんかあるものか！ 冗談ぢやないわ、本當に！ ハー！」

「さア此方へいらつしやい。風邪をひきますよ。」と牧師は當惑しながら云つた。「放つといて頂戴！」と酔拂ひ女は疊の上に横になつて云つた。「私は、一寸、兄さんに逢へばいゝん

だから。兄さんから、『鈴子！ 貴様死んで終へ！』と一言云つて貰へれば、私は行きますよ。決して教會のお邪魔なんかになり度かありませんからね。あゝ苦しい、牧師さん、水を一杯飲まして頂けませんかねえ。」

牧師は水をくみに臺所へ行つた。今度は山根が、鈴子を暖い部屋へ連れて來ようとした。彼は、女の體に觸るのが恐ろかつたので、かすれた聲で云つた。すると、鈴子は身を起して云ひ初めた。

「おや、貴方は山根さんね。放つといて頂戴。私見たいな女に近寄つちやいけなわ。山根さんは本當に善い人だけど、矢張り、同じ事だわ。貴方は運がよかつたのよ。それに、何うしてでしょう、貴方は、御自分の運のよかつた事に腹を立てゝゐらつしやるわ。御自分で御自分を突落さうとしてゐらつしやるわね。私は、何故か知らないけど、貴方を笑ふ氣にはなれないわ。だつて、貴方は、御自分に本氣に正直なんだもの。でも、それア本當に可笑しな事ですわ。御自分を突き落す必要がどこにあるでしょう。運がいいのは何も貴方の責任ぢやないわ！ 本當に正直な人が自分から落ちて行つても、決して、その人の氣持は平和でも幸福でもないわ。その人は運に逆つたのだもの。さア。私に近寄つちやいけませんわ。貴方に今一番大切な事は、私が風邪を引かうと首を縊らうと、知らない顔が出來

ると云ふ強い心ですわ。何故つて、貴方は、今不幸の直ぐそばに立つてゐらつしやるからなの。え、え、私と云ふ女がこの世に居ると云ふ事が、不幸なのですから——あ、放つといて頂戴、私は、誰かを救はうと云ふやうな心を悪みます。たとひ救はれても、救はれたと云ふ氣持位いやなものがあるでしょう。私は嫌やだ。私は、もう決心をしますわ。只だ、一つだけ私に判らない事があるの。それは、兄さんだけが知つてるの。兄さんに一言だけ聞けば私は、本當に『自由』になれさうだわ！

「さア水——」と牧師はコップを、鈴子の唇にふれて云つた。

父親は、矢張り元のまゝの姿勢で、頸垂れ、娘の方へは一度も見向かうとせず、凝つとうづくまつたまゝであつた。

「牧師さん。」と鈴子はきちんと坐つて云つた。

「何？」

「貴様にお訊ねするわ。」

「何を、だね？」

「私、貴方から牧師さんらしい答へをき、度くはないわ！ そんなこと、どうだつていゝわ。——私には、誰も憎んでやしません。それに誰も皆憎いの。それは何故でしょうねえ。訊かして頂戴！」

「ふん。それア、鈴ちゃんが自分を憎んでゐるからだよ。それで——」と牧師は云つた。

「もうそれで澤山。有難う。それが義兄さんの答へだわね。ぢや、山根さん。」と彼女は大きな眼をバツと見開いて云つた。「貴方私はどうしてさうなのか教へて下さらない？」

「僕は——」と山根は吃つた。彼は真赧になつた。そして云つた。「貴女はそれを知つてゐますよ！」

「まア！」と彼女は山根を真面にみつめながら云つたが、急にカラカラと笑ひ出した。

その笑ひは、併し、甚く不自然なものであつた。彼女は、心から笑はうと努めてゐるやうに思はれた。彼女はしどけなく、両手を疊について頭を肩の間にめり込ませるやうにして笑つた。忽ち、その乾いた笑ひは止まつた。見る見る彼女は、蒼白になつた。それは大理石のやうに冷めた顔であつた。そして、いつかその滑らかに光る頬の上を、涙がつたつてゐた。

「笑ひ過ぎて、涙が出ちやつた……」と彼女は白巾で頬を拭ひながら云つたが、涙は、次々に眼から溢れて來た。

「鈴子——」と、この時不幸な父親は初めて、此方へ涙にぬれた顔を向けた。彼は大きな咳拂ひをしたが、それは喉にからまつた。「俺は、お前に逢へようとは思はなかつた。お前は、お父さんに逢ひに来て呉れたんだな。俺は、うれしいぞ……」

鈴子は、今度は本當に嗚咽を白巾で押えながら、疊に身を伏せて泣き初めた。

牧師も山根も思ひくの感情に耐えきれずに泣いた。

「賢太郎君が来た！」と牧師は立上つた。

山根も思はず立上つた。彼も亦確かに足音を聞いたのだ。

二人は部屋を出て行つた。

父親は、娘の所へやつて来た。

「鈴子。壯健だつたな？ お前は、時には、お父さんの事を思ひ出して呉れたか？」

「お父さん。濟みませんわ！」と鈴子は顔を父親の膝に押しつけながら辛じて云つた。

「はつきり、お父さんに云つて呉れ——」と父親は、娘の、背中を撫でながら云つた。「矢張り、あの男の事が忘れられないか？」

「忘れて終ひましたわ。」

「お前は、これからどうして行くのか？」

「私は、兄さんと一緒に暮し度いの……。兄さんの考へは、私は書物を読んだだけで私には判りません。でも兄さんは、私がどうしたらいいかを教へて下さるのです。私は、それだけをたよりに生きて来ました。私は、もう、このまゝでは、死ぬより外に能はありません。私は生き甦らうと思ひます。私は、兄さんが、来て下さるのを毎日々々待つてました。そしてやつと、やつと、来て下さつたと思ふと、兄さんは、警察へ引かれて終ひました。私は、刑務所に逢ひに行きました。すると、兄さんは、待つてゐる、俺の出るまで——と云ひました。私は、この八ヶ月の間、自分が、心からもう腐つて終つてゐるのぢやないかと、怖い氣がしました。私は、苦しくつて、悲しくつて……」

「心配することはない——」と父親は云つた。「兄さんは、きつとお前を見殺しにしやしねえ。きつと来たんだ。そら皆やつて来た。俺は、知つてゐるんだ。お前は山根さんが好きだ。山根さんもお前が好きだ。何とかなるよ。決して心配するな。判つたな。鈴子、俺はもう腹がきまつたんだ。お前達は、もう一人前だ。俺に、とや角く云ふ権利はねえ。俺にも、いくらか、若い者の事が判つて来た。只だ、

時々、お父さんやお母さんの事を想ひ出して、たよりの一本も呉れ。それが俺の願ひだ。判つたな。」

扉があいた。

牧師が云つた。
「確かに、賢太郎君の足音でしたがねえ……。併し、きつと来て呉れますよ！」

五

その翌日から丸る五日間、牧師は、賢太郎を索ねに駆け歩いた。

彼は組合の支部事務所にも出掛けたし本部事務所にも出掛けた。その結果、皆同じ言葉を得たに過ぎなかつた。

「もう四五日お待ちになつて御覽なさい」——と組合の人々は云つた。それは賢太郎が、皆にさう云つて呉れるやうに頼んだらしく思はれた。

六日目の朝であつた。九錢の切手を貼つた手紙が達した。奇妙な名前の差出人は、賢太郎であつた。父母と、牧師と、妹と、山根とに當てた四本の手紙が入つてゐた。

彼は、東京から二百哩離れた地方の坑山の、激しいストライキの指導に、出獄の三日目に自から求めて出發したのであつた。

それは、「弱い意志」を克服する爲めの、彼の「強い意志」の表れであつた。思ふに、彼の生命は、個人の私事の中にあつては死であつたのであらう。彼は、それを、彼の頭に於いて、なく、階級の心を以つて判断し決行したのであつた。

彼は、妹にかう書いてゐた。

「——お前に足りないものは、憎しみだ。憎しみの爆發だ。憎しみの浅い程、愛も亦浅い。お前と、山根君との戀愛は、二人にとつて、幸福ではないかも知れぬが、決して不幸ではあるまい。併し、俺は、この種の問題に就いては全く無智識だ。それに今は非常に忙しい。云々——」

又牧師に、彼は簡單にかう書いてゐた

「——御健在を祈る。色々お世話になりましたね。僕は、あの夜、教會まで行きました。教會の庭に入つて初めて、私は決心がつかしました。私は、すぐ、同志の家へ引上げて終つたのです。今、僕は、忙しいので十分書けません、何れ又書きますが、何卒、両親を慰めてやつて下さい。妹や山根の

爲めにお骨折下さい。——(中略)それから、僕は此處に来て不思議な人物に出逢ひました。それは僕の少年の頃の教師、貴方以外のもう一人の教師、(僕を今日に到らせたのはこの教師です)よく僕が貴方に話したでしょう、馬方の息子の勝造さん。——この人に逢つたのです。全く思ひがけない邂逅でした。もう時効にかゝつてゐるから云ひますが、この勝造さんが、銅山の争議の時、所長の脇腹を刺した犯人その人です。なるべく誰にも云はないで下さい。彼は、今、細君があり子供があります。非常に酒癖が悪い上に、反動團體に屬して、争議の邪魔をしてゐるのです。併し、彼は、自から進んで、僕に逢ひに來ました。彼は、酒を飲んでゐましたが、泣きました。どう云ふ態度を、彼がとるかまだ判りません。又何れ後便で——。僕は、この争議で、生命を失ふかも知れません。炭坑は、この世の地獄です。さよなら」

この炭坑の争議は、日々ブルジョア新聞にも報道された。賢太郎の両親や、妹や牧師や山根達はその報道によつて、只だ賢太郎の安否を知るだけであつた。

終

昭和五年十一月十日印刷

稚き闘士

昭和五年十一月十五日發行

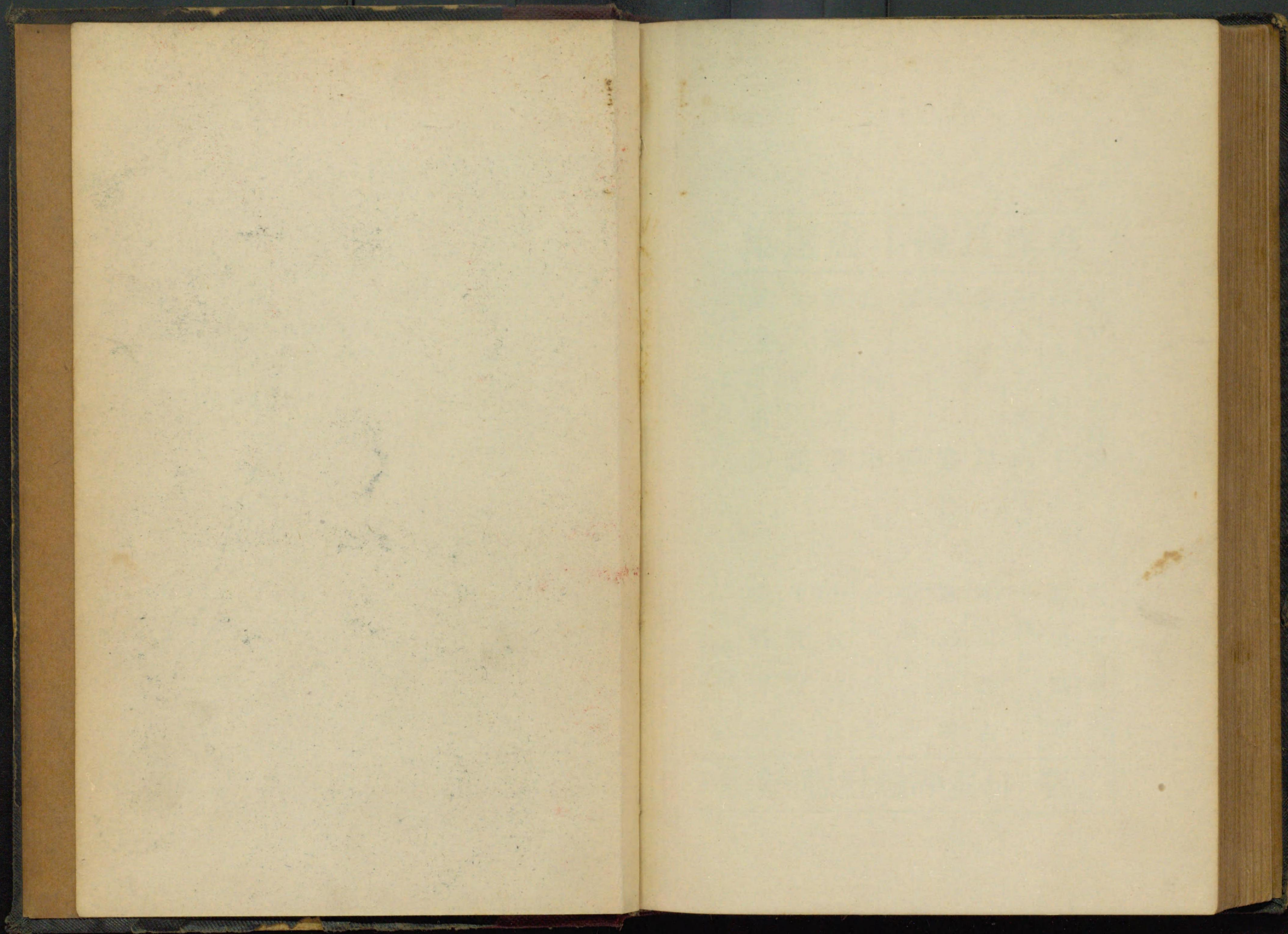
定價五十錢

| | |
|-----|------------------------------------------------------|
| 著者 | 葉山嘉樹 |
| 發行者 | 鈴木利貞 東京市麹町區九ノ内二ノ一八 |
| 印刷者 | 君島潔 東京市小石川區久堅町一〇八 |
| 印刷所 | 共同印刷株式會社 東京市小石川區久堅町一〇八 |
| 發行人 | 株式會社 日本評論社 |
| 發行所 | 東京・丸ノ内・昭和ビル 振替東京一六 電話九ノ内(25) 四一三一 四一三二 四一三三 |

新作家長編小説選集

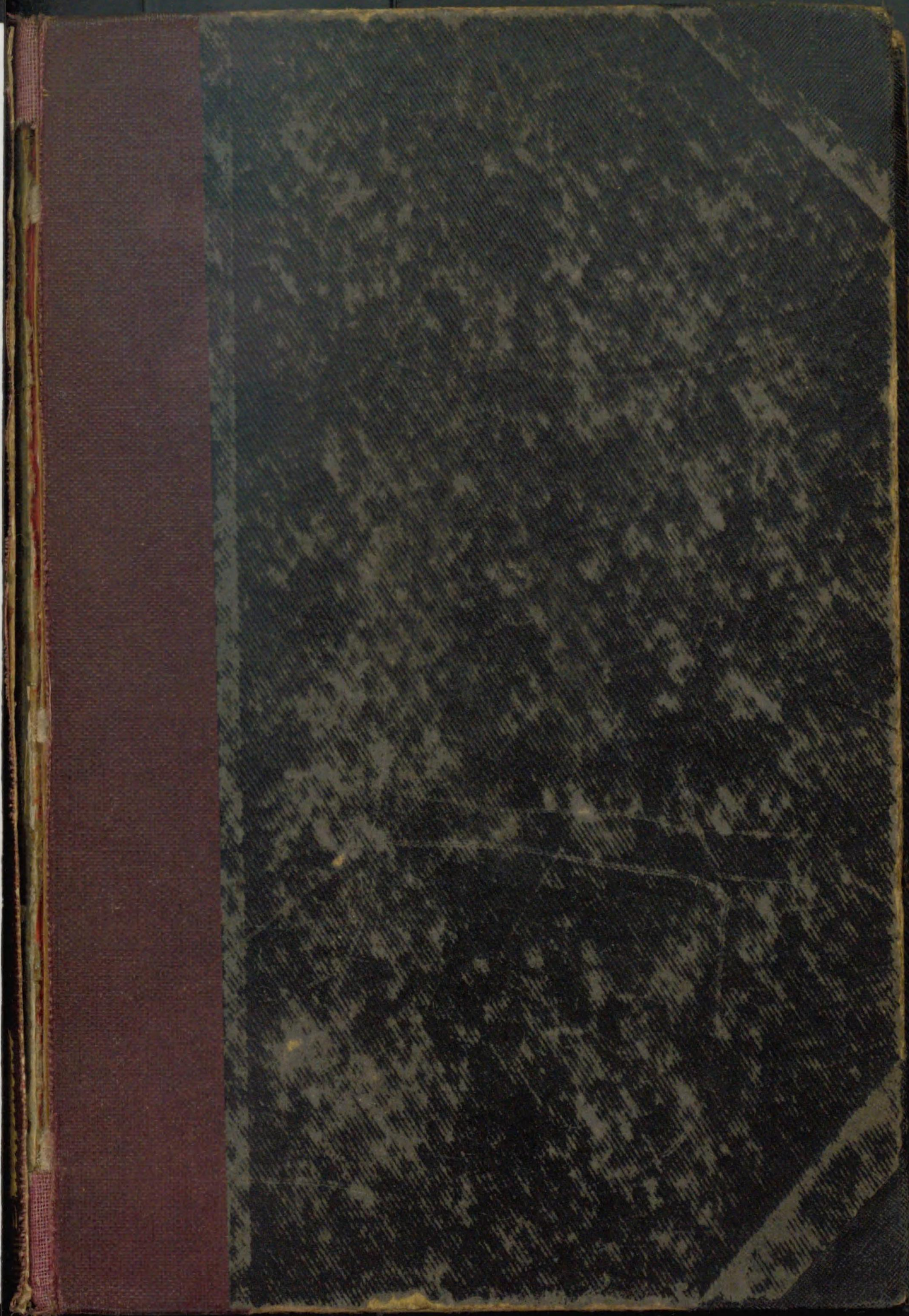
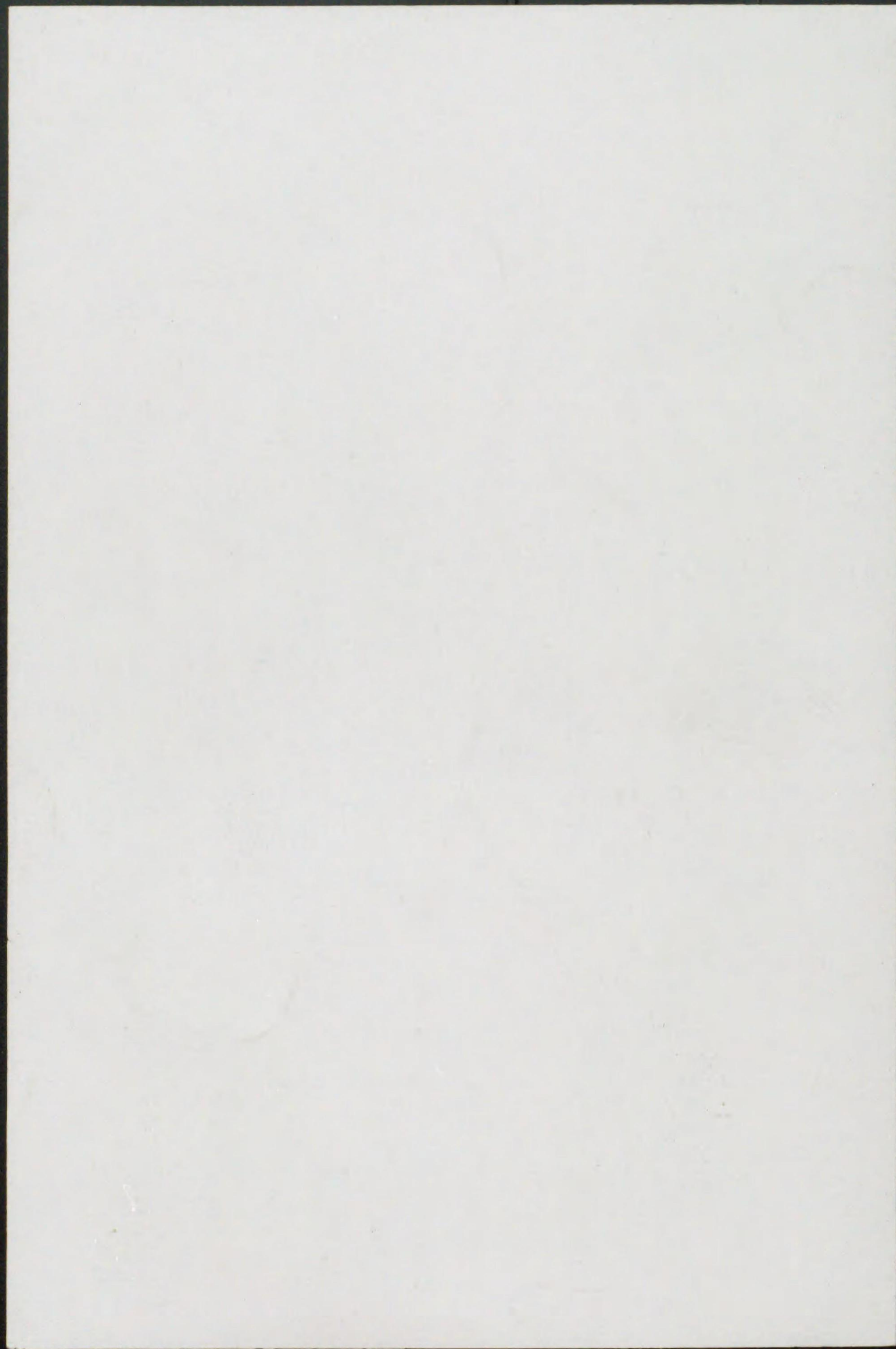
| | | | | | | | | | | |
|---------|------|-------|------|------|-------|------|-------|------|--------|----------|
| 或る時代の群像 | 稚き闘士 | 燃える森林 | 陰謀 | 砂糖 | 暴動 | 魚河岸 | 異國の戦争 | 女工戦 | 武装せる市街 | 支那から手を引け |
| 青野季吉 | 葉山嘉樹 | 平林たい子 | 細田源吉 | 細田民樹 | 伊藤永之助 | 金子洋文 | 小牧近江 | 今野賢三 | 黒島傳治 | 前田河廣一郎 |

四六三頁判。本日評論社版。各十五錢冊。





613
13

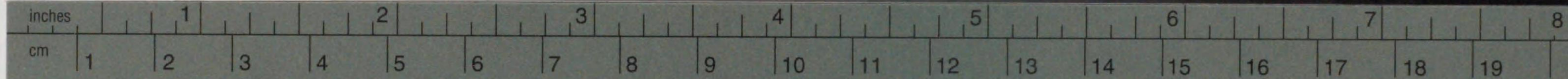


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

